市長が牽引！ エネルギー自給村 シュタイヤーベルク

北ドイツのシュタイヤーベルクはエネルギー自給村として知られる。人口 5200 人で、農業中心の田舎町だが、農業者による５つのバイオガス設備があり、設備容量 5400KW を誇る。そこで生まれた熱は、地域暖房として屋外プールや工場、95 世帯へ湯や暖房を供給している。また一部民間、一部市所有で 263 の太陽光発電装置、総容量 15551KW があり、年間 1340 万 KW 時を発電している。５万 3000KW の容量を誇る 37 基が並ぶ風力パークも壮観である。

市民参加による、再生可能エネルギーでの地域分散型の自給をめざしており、気候保護は経済的にも見合うことを証明したいと考えている。いずれはエネルギーの教育施設を作り、他都市の見本になりたいと構想は広がる。新たな地域暖房網も計画中。

気候保護の最強チーム（右が市長）

エネルギーの収支を見ると、再生可能エネルギーで一般世帯や事業所、産業会の 97％の電力を自給していることになる。これは年間６万トンの CO_2 削減を意味する。

市のエネルギー政策を牽引するのは、ハインツヨルゲン・ウェーバー市長である。元警察官で、2013 年より市長を務める。「子どもたちのため、今できることをしたい。2030 年、市はどうあるべきかを常に考えている」と、副市長と気候保護マネージャーの３人でチームを作り、気候保護に尽力している。

2016 夏より国のプロジェクト「マスタープラン　100％気候保護」に参加し、2050 年までに CO_2 排出量を 1990 年比で 95％削減し、エネルギー消費量を半分にすることを掲げている。このプロジェクトに参加すると、気候保護担当者の給与の８割を４年間国や州が負担してくれるため、今夏より気候保護マネージャーを採用した。

市長と話していて感じるのは「気候保護は必要である」という強い信念である。「自らが見本であるべき」として、自宅に 80 平米の太陽光温水器、15KW の太陽光発電装置、電気自動車、ヒートポンプ、湯を作れる暖炉があるほか、小さな風車を計画中である。将来のビジョンは「自動走行の電気自動車！」というから、まったく驚かされる。このような自治体がドイツでは各地に生まれており、気候保護だけでなく、地域の価値創造に貢献している。それにしても、市長、副市長、気候保護マネージャーという無敵チーム。これなら、市が変わらないはずはない。

ごみかんドイツ特派員　田口 理穂

ドイツで子育て

８月に新学年が始まり、４年生になった明は、修学旅行へ。４泊５日で 50 キロほど離れた田舎のユースホステルに泊まって、自然の中で遊ぶというもの。ドイツは小学校は４年生までで、５年生から学校が分かれるので、最初で最後のクラス旅行です。初日、学校に明を連れて行くと、バスが来ません。先生が電話をすると、運転手は「失念していた」とのこと。バスを予約したのは半年前です。通常ドイツでは、直前に再度確認するということはしません。それから待つこと１時間。子どもたちは校庭で遊び、先生は親と雑談したりとのんびりしたものでした。

それにしても荷物の多いこと。靴だけでも、運動靴、上靴、長靴、体育館用靴と４足。シーツに布団カバー、タオル、着替え、水着、おもちゃなど、子供用の小さなスーツケースとエコバックにぎゅーぎゅーに詰め込みました。「僕の荷物が一番大きいかな」と明は無邪気に言っていましたが、学校に来てみるとみな大人用の特大スーツケースばかり。そんな重いスーツケース、自分で持ち上げられないじゃない？　ともかく旅行はとても楽しかったらしく、明は大満足して戻ってきました。